

## ボージャの〈表示機能〉理論

本 田 義 央

本稿の目的は、ボージャ (Bhojadeva, 11 世紀) の主著 *Śṛṅgāraprakāśa* (ŚP) における言葉の〈表示機能〉(abhidhā/vṛtti) の議論を検討し、それがマンマタ (Mammata, 11-12 世紀) が *Kāvyaṣṛṅgāśa* (KP) において整理した表示機能の体系とは異なった枠組みで論じられていることを明らかにしたうえで、ボージャの理論の典拠がクマーリラバッタの *Tantravārttika* にあることを明らかにすることである。

ボージャの理論を検討する前に KP における〈表示機能〉の体系を先行研究に従って概観しておく<sup>1)</sup>。KP は、言葉の表示機能として、直接表示機能 (abhidhā)、間接表示機能 (lakṣaṇā)、暗示機能 (vyañjanā) という三つを立てる。それらのうち、直接表示機能は、言語協約によって定められた (saṅketita) 一次的意味／本来の意味 (mukhyārtha) を表示する言葉の一次的機能 (mukhyo vyāpārah) である<sup>2)</sup>。間接表示機能については、いわゆる「lakṣaṇā の三条件」を提示して説明する<sup>3)</sup>。すなわち、(1) 一次的意味の適用に障害があること (mukhyārthabādha)、(2) 一次的意味との結び付きがあること (tadyoga)、(3) 動機 (prayojana) が話者にあること、あるいは、転義用法が慣用 (rūḍhi) によって認められていることである。ここで、動機とは、特殊な印象を与えようとする作者の意図であり、その結果、聞き手はなんらかの特殊な印象を受ける。そして、この投手な印象を表示するのが、暗示機能 (vyañjanā) である。

ŚP は、別名を *Sāhityaparakāśa* ともいわれるように、言葉 (śabda) と対象／意味 (artha) の間の〈関係〉(sāhitya) の解明を目的としている。〈表示機能〉は、ボージャがあげる 12 の〈関係〉の一つである。ボージャはいう。

それら (12 の〈関係〉) のうち、〈表示機能〉(abhidhā) とは、対象／意味を表示する (arthābhidhāyini)、言葉のもつ能力 (śakti) である。言葉は、それ (〈表示能力〉) によって、[その言葉自体の] 語形 (svarūpa) [を表示するの] と同じように表示対象 (abhidheya) を表示する (pravartamāṇa) が、[その] 際には、[その表示対象に対して]、三つの機能 (vṛttitraya) を通じて、機能する (vartate)。そして、それら [三つの機能と] は、〈第一次

( 38 )

## ボージャの〈表示機能〉理論 (本 田)

表示機能) (mukhyā), 〈第二次表示機能〉 (gaunī), 〈間接表示機能〉 (lakṣaṇā) という三つである。(ŚP, R353. 2, J223. 2)

ここからボージャのいう〈表示機能〉 (abhidhā) が, マンマタの「直接表示機能」 (abhidhā) と一致しないことは明らかである。すなわち, KP においては, abhidhā は一次的意味 (本来の意味) (mukhyārtha) を表示する第一次表示機能 (mukhyavyāpāra) であるが, ボージャにおいてそれは〈第一次表示機能〉 (mukhyā vṛttih), 〈第二次表示機能〉 (gaunī vṛttih), 〈間接表示機能〉 (lakṣaṇā vṛttih) という三つの機能を含んでいる。以下にそれら三機能をボージャがどのようにとらえていたかを順次検討しよう。

ボージャによれば, 〈第一次表示機能〉は, たとえば, 'gauḥ' という語が喉袋等を持つ対象を知らしめるように, 対象を直接表示する〈表示機能〉である<sup>4)</sup>。〈第二次表示機能〉についてボージャは次のようにいう。

その同じ「'gauḥ' という」語は, 立ったまま用を足すこと (tiṣṭhanmūtratā) などという属性 (guṇa) をそなえていることに依存して, ヴァーヒーカ人を表示するとき, 〈第二次表示機能〉 (gaunī vṛttih) を発揮する (anubhavati)。すなわち, [次のように] いわれている。「言葉は, 実在をその表示対象とはしない (asadārtha) が, 世間では慣用 (rūḍhi) によってあるもの (甲) に対して使用される (niveśita)。そ [の言葉] が一次的 [な言葉] である。その場合, 言葉が, それ (甲) との共通性にもとづいて, [甲とは] 別のところで躡くとき (skhaladgati) [つまり別の対象を表示するとき], [その言葉は] 二次的 [な言葉] である。」(ŚP, R. 353. 6, J223. 6)<sup>5)</sup>

ここで, ボージャが念頭においている表現は, {gaur vāhikaḥ} (「ヴァーヒーカ人は牛だ。」) である。この場合, 'gauḥ' は, 喉袋等をもつ対象を表示するのではなく, ヴァーヒーカ人を表示する。その際に, 'gauḥ' が 'vāhikaḥ' と同格におかれてヴァーヒーカ人を表示しうるのは, 牛とヴァーヒーカ人には立ったまま用を足すことなどの共通の属性があるからである。それに依拠して, 'gauḥ' は, ヴァーヒーカ人を〈第二次表示機能〉によって表示する。

〈間接表示機能〉について, ボージャは次のようにいう。

一方, 言葉がそれ自身の意味にもとづいて (svārthatas), 行為成立 (kriyāsiddhi) に対して能成者 (sādhana) となりえない時, [言葉はそれの] 表示対象 (abhidheya) と不可離の関係にある (avinābhūta) 別の対象 (arthāntara) を間接的に表示する (lakṣayati)。そしてそのような時に, かの間接表示機能 (lakṣaṇā vṛttih) がある。たとえば, 「ガンジス川に牛飼いが住んでいる。」 (gaṅgāyām ghoṣaḥ prativasati) [という表現がある]。この表現において, 'gaṅgā' という語は, 水の特定の流れに対して慣用的表示能力をもつ (nirūḍhābhidhānaśakti)。

そして、それ（水の特定の流れ）は牛飼いを行為主体とする居住行為（*prativasanakriyā*）の基体（*adhikaraṇa*）とはなりえず、それ自身の表示対象〔であるガンガー〕と不可離の関係にある岸を間接的に表示する。（CP, R. 353.10, J223.10）

ここで、ボージャは、「言葉がそれ自身の意味にもとづいては、行為成立に対して能成者と成りえない時」というが、これは最初にみた KP の *lakṣaṇā* の三条件でいえば、「一次的意味の適用に障害があること」にあたる。ただし、ボージャの場合は、単に「障害がある」というだけでなく、行為の能成者（*sādhana*）となりえない場合というように、その範囲はより狭い。「ガンガーに牛飼いが住んでいる。」（*gaṅgāyām ghoṣaḥ prativasati*）という表現の場合には、‘*prativasati*’ という動詞によって居住行為（*prativasanakriya*）が表示されているが、その居住行為の行為主体は牛飼いであるはずである。しかし、居住行為のおこる場所として第七格で表されているガンガーは、水の特定の流れにすぎないから、居住行為を成立せしめる行為の能成者、目下の例では行為のおこる場所（*adhikaraṇa*）、とはなりえない。このような場合、そのガンガーと不可離の関係にある（*avinābhūta*）別の対象、すなわち、ガンガーの岸を「ガンガー」は、〈間接表示機能〉によって表示することになる。ここでボージャのいう「不可離の関係」は、ガンガーとその岸との近接関係である。それは、「ガンガーに牛飼いが住んでいる。」という場合の〈間接表示機能〉が、ボージャが施す〈間接表示機能〉の下位分類のうち、隣接した別ものの理解の原因（*samīpārthāntarapratītihetu*）とされる近接関係に基づく間接表示機能（*sāmpīyalakṣaṇā*）に分類されていることから確かめられる<sup>6)</sup>。ところで、このような、〈第二次表示機能〉と〈間接表示機能〉の区別は、類似性に基づくものを〈第二次表示機能〉、類似性以外の関係に基づくものを〈間接表示機能〉としたクマーリラの考えに基づいている<sup>7)</sup>。このことは、ボージャが ŚP 第 9 章において、〈第二次表示機能〉と〈間接表示機能〉は同じではないということを述べて、クマーリラの *Tantravārttika*, *Tatsiddhyadhikaraṇa* (on JS 1. 4. 22) の一節を引用して説明していることから明らかである。すなわち、ボージャは次のようにいう。

しかし、*lakṣaṇā* と *gauṇī* は同じだといってはならない。なぜなら、[クマーリラ] バッタが「つぎのように」述べている。「『表示対象（*abhidheya*）と不可離の関係にあるものを知らしめるのが〈間接表示機能〉（*lakṣaṇā*）であると考えられる。一方、間接的に表示されている属性（*lakṣyamānaguṇa*）との結び付きに基づいて（*yogāt*），〈表示機能〉（*vr̥tti*）は二次的なもの（*gauṇatā*）と考えられる』ここで、*lakṣaṇā* の場合に、普遍を表示する（*ākṛtivacana*）言葉（*śabda*）が、それと共にある（*tatsahacaritā*）個物（*vyakti*）を間接的に表示する

( 40 )

ボージャの〈表示機能〉理論 (本 田)

(lakṣayati) のとまったく同じように、棒 (yaṣṭi)・ベッド (mañca)・灯火 (pradīpa)<sup>8)</sup> など  
はそれらと関係する (tatsambaddha) 人等という間接的なものを対象としてあらわれる。

一方、二次的表示機能の場合には、「子供は火だ」(agnir māṇavakaḥ); 「デーヴァダッタ  
はライオンだ。」(simho devadattaḥ), 「ヴァーヒーカ人は牛だ。」(gaur vāhikaḥ) などとい  
う場合に、子供 (māṇavaka) などは、火性 (agnitva) と不可離なものとしては理解されな  
い。そうではなくて、『火性を特徴とする対象から赤茶色などが理解されるが、子供にあ  
るそれ [赤茶色等] と [火にあるそれと] の類似性にもとづいて (sādṛśyāt), 「[子供は火  
だ] という」知識がおこる。』(CP, R556. 9, J358. 15)

{yaṣṭih praveśaya} という表現の場合は、‘yaṣṭi’ は、それを持つ人、すなわちブ  
ラーフマナを〈間接表示機能〉によって間接的に表示する。一方、{gaur vāhikaḥ}  
の場合は、牛とヴァーヒーカ人の間に不可離の関係はないから〈間接表示機能〉  
は発揮されず、牛の行儀の悪さとヴァーヒーカ人にある行儀の悪さとの類似性  
にもとづき、‘gauḥ’ は〈二次的表示機能〉によってヴァーヒーカ人を表示する  
のである。

最後に、ŚP における〈表示機能〉の理論と KP におけるそれとの対応をま  
とめておく。ボージャにおいては、‘abhidhā’ は、〈第一次表示機能〉・〈第二次表示機  
能〉・〈間接表示機能〉という三つの表示機能を含み、KP とは異なって、‘abhidhā’  
は一次的機能 (mukhyo vyāpāraḥ) だけを意味するわけではない。また、ボージャ  
〈第二次表示機能〉と〈間接表示機能〉は、KP においていずれも間接表示機能  
(lakṣanā) のもとにまとめられている。

[文献および略号] Josyer, G. R., ed. 1955-63 *Mahārāja Bhojarāja's Śṛṅgāraprakāśa*. Mysore  
(略号 J). Raghavan, V. 1978. *Bhoja's Śṛṅgāraprakāśa*. Raghavan, V., ed. 1998. *Śṛṅgāraprakāśa  
of Bhoja*. (略号 R). Raja, K. K. 1969. *Indian Theories of Meaning*. Madras. 宇野智行 1988  
「ミーマンサー学派における聖典解釈の一形態」『哲学』47: 67-81. 小林信彦 1960-61  
「LAKṢANĀ の機能対象 LAKṢYĀRTHA」(I) (II), 『インド学試論集』1-2: 1-23, 31-43.

1) Raja (1969, 229-273) 及び小林 (1960-61) による。 2) KP 2, k. 8. cd. 3) KP  
2, k. 9. 4) CP, R 353. 4, J. 223. 4. 5) 後半の引用部分は *Pramāṇavārttika*, Pratyakṣa  
k. 37 にほぼ一致。 6) CP, R 369. 10. 7) クマーリラの lakṣanā については宇野  
(1988, 70-71) を参照。 8) *Tantravārttika* では、‘yaṣṭimāñxāēvādayas’ と読む。この読  
みの場合は、以下に述べる {yaṣṭih praveśaya} の他に {mañcāḥ krośanti} {śvasahasreṇāmuko  
rājā jitaḥ} という三例が考慮されている。一方、ŚP の引用では最後の例は {mallikā pradīpaḥ}  
となるが、これについては別稿を期す。

〈キーワード〉 abhidhā, lakṣanā, gauṇī, vṛtti, 間接表示機能

(広島大学助手)